

日本におけるニーチェ受容史瞥見 (2)  
——ニーチェをめぐる明治期の言説 (1)——

湯 浅 弘\*

An Essay (2) on Japanese Interpretations of Nietzsche  
Discourses on Nietzsche in the Meiji era (1)

Hiroshi YUASA

要 旨

本論文は、日本におけるニーチェ受容史研究の一環として明治期の美的生活論争に検討を加えようとするものである。美的生活論争は高山樗牛の「美的生活を論ず」に端を発する論争で、1901年から1903年にかけて多くの知識人を巻き込んで行われた論争である。その論争における重大なトピックの一つがニーチェの思想であり、その論争は、明治期のニーチェ解釈を探る上では最も重要な対象の一つである。本論文では、まず、その論争にアプローチするための方法論的考察を行い、次にこの論争がニーチェの思想をめぐる論争になっていった経緯について考察する。

キーワード：ニーチェ，高山樗牛，文明批評，美的生活論争，明治思想史

1 問題の所在

日本におけるニーチェ受容の歴史を考えようとする場合、明治期のニーチェ解釈をどう捉えるかという問題を避けて通ることはできない。

そもそも明治期にニーチェの思想はどのような経緯をもって日本に移入されたのか？ また、ニーチェの思想は明治期の日本の知識人にどのようなものとして受け取られ、より広範な読者

---

\*教授 哲学・ヨーロッパ近現代思想史

層にどう紹介されたのか？そして、そのような移入と紹介の過程において示されているニーチェ理解は、どの程度正鵠を射ていたのか、あるいはいなかったのか？また、ニーチェ思想の解釈としては誤解や無理解を含むとしても、ニーチェをめぐる当時の言説にはどのような思想史上、ないしは文化史上の意味を読みとることが可能なのか？明治期のニーチェ解釈を対象とすれば、おのずからこのような一連の疑問に逢着することになる。

こうした問題に関わる先行研究によれば、これら一連の問いには既にある程度の解答が与えられており、その大略は、例えば、ニーチェ受容史に関する基本文献の一つである『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』<sup>1)</sup>によって知ることができる。詳細はその文献に譲るとして概要を纏めれば、明治期のニーチェ受容史は凡そ以下のように描き出される。

まずニーチェ思想が日本に初めて紹介された時期は1890年代中頃であり、それはヨーロッパにおいてニーチェが注目され始めた時期とほぼ重なる時期である。伝聞や書籍の移入といった点も含めてニーチェ思想が日本人に紹介された主たる経路は幾つか確認されており、1890年代後半から1900年にかけては『太陽』『帝国文学』『早稲田學報』『哲學雑誌』といった当時の主要な雑誌にニーチェ思想に関する数篇の紹介論文が掲載され始めた由である。

以上がニーチェ思想の最初の移入と紹介の段階だとすれば、日本におけるニーチェの扱いに劇的な変化が生じ、ニーチェ受容史が新たな局面を迎えたと考えられるのは1901年のことである。これはニーチェに関する論考の急増によっても確認されるが、高山樗牛の名前と結びつけられて語られることの多い、いわゆる美的生活論争の始まりである。当時の論壇に巻き起こった日本におけるこの最初のニーチェ・ブームは1903年頃まで続いた。

この論争が沈静化したのち明治末年までは、ニーチェの著作の翻訳が生田長江などによって試みられたほかにはニーチェ受容史に特筆すべき変化はなかった。その後、和辻哲郎の大部のニーチェ研究が刊行されるのが1913年（大正2年）であるが、その和辻や阿部次郎に代表される大正期には明治期とは異なる質のニーチェ解釈が登場し、ニーチェ受容史は明治期とは別の局面に入ったと考えられる。

以上が、上記文献から読み取られる限りでの、明治期におけるニーチェ受容史の概要である。主として外回りの事情に着目した便宜的な時期区分とはいえ、ニーチェをめぐる明治期の言説をこのように区分すること自体に異論はあまりないと思われる。筆者自身も以上のようなパースペクティブを前提としているが、こうしたパースペクティブから見ると明治期のニーチェ受容の中心的な出来事として浮かび上がってくるのは、やはり美的生活論争であると言ってよいだろう。

では、美的生活論争とは何であったのだろうか？言い換えれば、ニーチェ受容史という文

脈において美的生活論争の思想史的意味、文化史的意味は、現在から見てどのように捉えられるのだろうか？

本稿が主題とするのは、こうした問いである。このように問題を立てるならば、大別して2つの視角からのアプローチの仕方が考えられるが、その2つの視角は美的生活論争という現象の持つ両義的性格に対応するものである。本稿の問題設定をより明らかにするためにも、まずはそれら2つのアプローチの方法を明確にしておきたい。

既に触れたように、美的生活論争は1901年から1903年にかけて（明治34年から明治36年にかけて）当時の論壇を賑わせた論争であり、確かにニーチェ、あるいはニーチェ主義といった言葉をキーワードとした言説群から成る論争であった。その限り、この論争は明治期という日本のニーチェ受容史の初発における際立った出来事として、そこにおいて明確な位置を持つべき重要な論争だと言ってよい。この点から考えるならば、ヨーロッパにおける当時のニーチェ解釈の水準との対比といった論点も含めて、美的生活論争で生み出された言説がどのような質のニーチェ解釈たり得ているかを問うという視点が成り立つ。自明のことではあるが、まずはこうした視角からのアプローチが一つの方法として想定できる。

だが、その論争が美的生活論争と呼ばれているのは、後述するようにそこに若干説明を要する経緯があるにせよ、1901年8月雑誌『太陽』第7巻第9号に掲載された高山の「美的生活を論ず」（1901年）という論考がその論争の発火点となったためである。また、ニーチェ論として論述されたのではないこの論考に発する論争が、当時さほど知られてはいなかったはずのニーチェをめぐる白熱したのも、一つには当時の日本の論壇（こう言ってよければ、当時のジャーナリズム）における高山のある種のカリスマ性によるためだと思われる<sup>2)</sup>。この点から考えれば、知識層の思想状況や時代の雰囲気といった当時の日本の広範な文化状況との関連でこの論争を位置付ける必要があるのも言うまでもない。こうした視角から見れば、美的生活論争はニーチェ受容史という枠を超えた明治思想史全般の重要なテーマであると言ってよい。この論争でのニーチェをめぐる言説をそうした展望の中で捉えるというアプローチが、美的生活論争へのもう一つのアプローチの方法として無理なく想定できるのである。

あらためて言うまでもなく、これら2つの視点は背反するものではなく、むしろ相補的なものである。だが、美的生活論争を対象とする従来の研究が、これらのうちどちらかの視点に偏りがちであったことも事実である。

端的に言えば、現代のニーチェ研究者で、美的生活論争における言説をニーチェ解釈の水準の高さ故に評価するという人間はまずいないであろう。第1の視点からのみ見るならば、それらの言説はむしろ一顧だにする必要のない無用の言説群であって、多くのニーチェ研究者の視

界の埒外に置かれるのが通例である。それ故、その論争での緒言説が取り上げられ論評される場合でも、それらはその時代における諸々の制約のため限界のあるニーチェ解釈であったと同定されるのが一般的だと見てよいだろう。例えば、『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』の編者の一人である西尾幹二は、明治期におけるニーチェ解釈全般に関して「一般に明治時代のニーチェ理解には限界があった。早い時期の翻訳者の生田長江や戸張竹風の書いたエッセイの類を見ても、正直、正視するに忍びない。」<sup>3)</sup>と書いている。戸張竹風は、後述するように実は高山樗牛以上に美的生活論争に深く関与した人物で、おそらくその時代にニーチェの思想に最もなじんでいた日本人の一人と見てよい人物であるが、そういった人物の言説すらこのように論評されても仕方のない面を持っているのである。

念のために付け加えれば、この西尾の論評は「この九十年の展開」というタイトルの、日本人のニーチェ解釈史に関する包括的な論述に見られるもので、西尾が生田や戸張を特に辛辣に批評しているというわけではない。この文章に続けて「その頃のドイツにおける理解の仕方さえはなはだ偏頗だったのだから、止むを得ないとも言えるだろう。」<sup>4)</sup>と書かれていることからそれは窺われるが、方法的に明白に第1の視点に立って書かれた文章である以上、こうした論評が導かれるのはむしろ当然だとも言えるのだ。

美的生活論争に関する個々の言説すべてを同列に扱うことはできないし、また「この九十年の展開」において西尾がそうしているわけでもない。ただ、現代のニーチェ解釈の水準に照らして過去のニーチェ解釈を評価するという視点のみでは、以上のような基調の評価にならざるを得ず、おそらく美的生活論争における諸言説を正当に捉えることはできないと思われる。第2の視点からのアプローチが要請される所以である。

実は、西尾はそのすぐれたニーチェ研究書では、日本におけるニーチェ像の変遷を問題とするなかで高山樗牛にも論究している。そこでの記述の一つの基調は、美的生活論争の頃には日本ばかりでなくドイツにもすぐれたニーチェ理解は存在しなかったという同様の主張にある。だが、そこではそれに加えて美的生活論争の文化史的意味にも言及し次のように書いている。

樗牛にはニーチェと同じように、世間の道徳を相対化して、個人的な自我の無制限な拡大を求める声というのはたしかにあるので、当時のヨーロッパ全土がニーチェの虚像に大きな反響を示したある精神状況が類似の形で日本にも存在していた事情を物語っている<sup>5)</sup>。

これは十分に論証された主張ではない。だが、ここに示されている洞察は美的生活論争の思想的意味、文化史的意味に関するきわめて的確な指摘であると筆者には思われる。同様の指

摘は、明治思想史を扱った松本三之介や末木文美士にも見られるが<sup>6)</sup>、これらは明治30年代の個我の思想の台頭という文脈のなかに高山樗牛の思想を位置付けようとするもので、やむを得ないことだが、高山のニーチェ理解の質を問題にするという視点はこれらには欠けている。

とはいえ、西尾の指摘も含めてこれらは、美的生活論争を第2の視点から捉えようとする際には無視できない重要な指針であると思われる。ただ、いま若干触れたように、これらは美的生活論争におけるニーチェをめぐる言説を十分に捉え切れてはいないと思われる。これも既に触れたことだが、美的生活論争は高山の名前と結び付けて語られることが多いとはいえ、取り上げるべき言説は高山のものだけではない。それに関わった主要な人物だけでも、高山のほか坪内逍遙、長谷川天溪、登張竹風、島村抱月などがある。また、その論争に直接関わったわけではないにしても、当時の日本人のニーチェ理解の質を問題にするという観点から見れば、後に宗教学者として大成する姉崎正治や哲学者の桑木巖翼などの知識人の言説も取り上げられるべきである。差し当りこうした外回りの事情にのみ着目するだけでも、上記のような研究に不備があることは明らかなのである。

このように関連する知識人の広がりから見ても、この論争は明治30年代のニーチェ理解の在りよう、ひいては日本の知識人の思想の在りようを捉える上では無視し得ない重要な出来事であった。本稿は、以上論述してきたような見通しのもとに、高山以外の論者も含めてこの論争と関連する知識人のニーチェをめぐる言説を吟味しようとする試みであるが、あらかじめ2点のことをお断りしておきたい。

まず第1点は、参考文献に関わる事柄である。以上のような問題関心から日本人のニーチェ受容史に関わる文献にあたってきたが、筆者の知ることができた限りでは、全く意外なことにニーチェの日本への移入、紹介から美的生活論争の頃までのニーチェ受容に関する最も包括的な研究はドイツ語で書かれているものであった。その研究は、おそらくは日本人の研究者ならば、まず出来ないと思えるほど愚直なまでに美的生活論争に関わる個々のテキストを読み込んだ上で、的確な理解を示している著作であったので、本稿でもその著作を適宜参照しつつ論述を進めることをまずお断りしておきたい。その研究とは次のものである。

Hans-Joachim Becker, *Die frühe Nietzsche-Rezeption in Japan (1893-1903) Ein Beitrag zur Individualismusproblematik im Modernisierungsprozess*, Otto Harrassowitz (Wiesbaden), 1983

また第2点は、本稿は以上のような方針の下に関連する個々のテキストを吟味しつつ進める予定であるが、諸般の事情により今回発表するのは、その前半部のみだという点である。

さて、以上をお断りした上で、本論に入りたいと思う。

## 2 美的生活論争の発端

既に触れたように、美的生活論争の引き金となったのは、「美的生活を論ず」（1901年）という高山の論考である。このさほど長くはない論考が、その後2年あまり続くニーチェをめぐる論争を引き起こすきっかけとなったということは、当時の事情を若干辿らなければ理解不可能である。この論考はニーチェ論だというわけでもないばかりか、そもそもこの論考にはニーチェという名前すら登場してはいないからである。そこでまずこの節では、テキスト解釈には深入りせずに論争の発端を中心に論争の経緯に関して若干触れておこう。

まず、ニーチェの思想とこの論考との関係はともかくとして、この論考が論争を引き起こすほどの衝動力をもって受け止められたのは、既に触れたように、一つには言論界における当時の高山のある種のカリスマ性に負うところが大きいと思われる。言論界において格別の注目を集めていた高山が、それまで主張してきた日本主義とは明らかに色合いの異なる主張をし始め、しかもその主張が本能の満足を人生の幸福と見る当時としては過激な個人主義の主張であると受け止められた。こうした事情のため、多くの読者に強い関心と激しい反発が引き起こされたことは確かであろうが、最初の反応は同月の讀賣新聞紙上、長谷川天溪の「美的生活とは何ぞや」という論説として現れたのである。

この長谷川の論説を承けて、それに答える形で登張竹風が翌月『帝國文學』第7巻第9号にある論考を発表する。このやりとりを発端として「美的生活を論ず」をめぐる言説は論争としての色彩を強く帯びていくことになるが、論争においてニーチェの思想が重要な主題となってゆく一つの大きなきっかけとなったのが、実は登張のこの論考である。「美的生活論とニーチェ」というタイトルを持つその論考で、登張は高山の議論とニーチェの思想を明白に結び付けて次のように書いたのだ。

吾等の見る所を以てせば、高山君の「美的生活論」は、明かにニイチェの説にその根拠を有す。さればニイチェが學説の一斑に通ずるものに非ずんば、到底その本意を解し難し、況やその妙味をや<sup>7)</sup>。

登張はこう宣言した上で、美的生活論の論旨とニーチェの思想を逐一結び付ける論述をしている。登張のニーチェ解釈は後述するとしてここでまず確認しておきたいのは、こうして美的

生活論争をニーチェ論争にする軌道を設定し、その後、論争の一方の当事者として主導的な役割をはたしたのは、高山ではなく登張であったという点である。

とはいえ、高山の美的生活論とニーチェの思想を結び付けたのは、登張の牽強付会というわけではない。高山はこの年の1月に『太陽』第7巻第1号に発表した「文明批評家としての文学者」で大いなる文明批評家の範例としてニーチェを挙げ、ニーチェへの共感を露わにしているからである。もともとこの論考は副題に「本邦文壇の側面評」とあるように、当時の日本の文学者のあり方への批判を意図して書かれたものであるが、高山はその冒頭部分でドイツにおいて現在強い影響力を持つニーチェという存在に対して強い関心を表明しているのである。

このような経緯を考えれば、美的生活論の論旨とニーチェの思想を結び付ける登張の指摘は、むしろ暗黙のうちに読者の側に予感されていたものに明白な形を与えたと言った方が正確かもしれない。高山と登張は旧知の間柄であるし、その後、高山はニーチェを擁護する友人姉崎との往復書簡を公表するという形でこの論争に間接的に関与してゆく。高山自身はこの論争に関してはいわば静観していたと言ってよいが、それはニーチェの思想を擁護する側に対して好意的な静観であったと見てよいだろう。

ともあれ、以上のような形でこの論争は始められた。その後、先に言及したような人々も参加して、ニーチェの思想なるものを擁護する論者とそれを危険視する論者の論争が続けられてゆく。次に見るべき問題は、当時の人々にとってのニーチェの思想なるものの内実である。節をあらためて、論を進めたいと思う。

## 注

- 1 高松敏男・西尾幹二編『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』、白水社、1982年
- 2 この点に関しては次のような適切な論評がある。橋川文三「高山樗牛」、明治文学全集40、筑摩書房、1970年所収、pp.387-388
- 3 高松敏男・西尾幹二編、前掲書 p.518
- 4 同上
- 5 西尾幹二『ニーチェ第一部』、中央公論社、1977年、p.15
- 6 松本三之介『明治思想史』新曜社、1996年、pp.191-211 末木文美士『明治思想家論』トランスビュー、2004年、pp.138-166
- 7 明治文学全集40、筑摩書房、1970年、p.311